京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十二卷 第一號

昭和十六年一月

論叢

國家科學としての經濟學……經濟學博士 谷口吉彥
林子平とその經濟思想……經濟學博士 本庄榮治郎
調査における統計の役割……經濟學博士 蜷川虎三
我國經濟發達の特質に就て……經濟學士 堀江保藏
公庫制の生成機緣……經濟學士 德永清行
道家の經濟思想……經濟學士 穗積文雄

研究

シュピイトホフの景氣理論の批判……經濟學士 青山秀夫
下請制工業の國民經濟的意義……經濟學士 田杉競
英國經濟學に於ける東洋社會の理論……經濟學士 島恭彥

說苑

貿易統計の新しい任務……經濟學士 有田正三
アッシニア紙幣……經濟學士 河野健二

附錄

彙報・外國雜誌論題

英國經濟學に於ける東洋社會の理論

島　恭　彦

一　序　說

英國經濟學に於ける東洋社會の理論と云ふ主題は資本主義的諸理論を中心として展開された從來の英國經濟學史の立場からすれば、恐らく奇異に感ぜられるかも知れない。併し樣々な經濟構成を持つ諸民族をその內に包括して一大植民帝國となつた十九世紀の英國を考へれば、斯樣な問題は別に不自然でもないし、又東洋社會に關心をいだく英國經濟學が現に存在したのである。東洋社會に關する知識がどうして英國經濟學に取入れられたかについては嘗つて發表した事があるから省略するとして、こゝでは本題に特に關係のある次の樣な事情を指摘しておかう。

十八世紀末より十九世紀にかけて、英國の對印度政策の樞軸たる東インド會社は議會の監督下に置かれ、英國政府の行政機關の性質を帶びるに至つた。かゝる印度支配の構造的變化に對處して、當時の印度總督ウエルスリー卿 (Lord Wellesly) は英系印度官吏の素質向上のために官吏養成學校をカルカッタに設立しようとした。この學校はウエルスリーの意圖によれば、印度の歷史、言語、慣習、回教徒やヒンヅー教徒の法律、宗教、アジアに於ける英帝國の政治的、經濟的利害等に關する知識を與へる筈であつた。ウエルスリーの本來の意圖は實現しなかつたが、其後（一八〇六年）英國のヘーリベリー (Haileybury) に東印度學校 (East India College) が設けられ、約半世

1）拙稿、英國經濟學と東洋社會の問題、東亞問題、第二卷、第七號。

紀の間ウエルスリーのプランに從つて印度官吏を教育した。[2] この學校の教官に吾々は經濟學者マルサス及び以下研究しようとするリチャード・ジョオンズを見出すのである。

ジョオンズがこの學校に見出されるのは必しも偶然ではない。彼は當時の英國を風靡した自由貿易主義、世界主義の經濟學に對して反對の態度をとり、英國に存在する典型的な資本主義社會の常識を以て世界の情勢を割り切らうとする市民經濟學の偏狹さを批判し、一大植民帝國たる英國の政治は更に廣い觀點に立たねばならないことを主張するからである。ジョオンズはかゝる意識を以て彼の經濟學を當時の市民經濟學一般よりも高いレベルに引きあげようとした。例へばリカルドの經濟學の如きは資本家やその代辯人の御用をつとめるものだが、ジョオンズの經濟學は學者、特に政治家に教示を與へる任務を持つてゐる。即ち「その職務上他の國々や自分の統治し得る帝國内の種々なる領域の相對的力や資源等を理解し比較研究することを要する政治家に對してヒントを與へるために。」[3] 吾々はこのジョオンズの主張の中にかのウエルスリー的意識を見てとることが出來ないだらうか。

それは兎も角吾々は次に特にジョオンズを選んでその經濟學の中に如何に東洋社會が取扱はれてゐるか、又それには如何なる限界が見出されるかを考察して見たい。その爲に先づジョオンズ經濟學の方法論的基礎に立入つて分析しなければならない。

二　ジョオンズ經濟學に於ける經濟構成の理論

ジョオンズ經濟學の著しい特色は歴史主義である。「政治經濟學に於て普遍的であらうとする原理は社會の最も包括的な觀察の上にのみ基礎づけることが出來る。」[4] と言ふ恰も獨逸の歴史學派を思はせる樣な主張が彼の主著の

2) V. A. Smith, The Oxford History of India. p. 561 ff.
3) Richard Jones, Literary Remains. p. 544.
4) Jones, An Essay on the Distribution of Wealth and on the Sources of Taxation. Part. I. Preface.

序文に見られる。事實彼はドイツ歴史法學の巨匠ザビニーやニーブルの名を既に知つてゐたのであつた。

この英國經濟學に珍しい歴史主義は明かに自由貿易の闘士リカルドに對立するマルサス＝ジョオンズ的立場、即ち穀物關税と共に地主階級の傳統的勢力を擁護しようとする立場より生れて來る。併しこの保守主義的立場が一轉して英國經濟學内部に於ける自己反省の役割を果たしてゐることにこの際特に注意しなければならないのである。即ちリカルド派が自分達の戰ひとらうとしてゐる自由貿易制を以て全世界に妥當する普遍的原理とする抽象性を批判し、過去の傳統が鞏固に支配する廣大な領域のあることを指適した點である。「吾々は英國人としてしば〳〵ある種の誤謬に陷る。吾々はあまりにも自分達の住んでゐる社會の狀態をすべての他の社會の典型と考へやすい。この狹隘なあやまつた假定は必ずや多くの無智と誤謬の源となる」[5]ジョオンズは又ロンドンのキングス・カレッヂで行つた講演の中で次の樣にも言つてゐる。「地球上の他の諸民族の中に現れる現象を知らなくても、吾國の經濟の諸要素や組織だけを研究してゐれば、やがて他の民族のものとなり、其故に普遍的なものとなる筈の事物の狀態に關する知識を得たことになるであらうと信じてゐる人がゐる。諸君、私はかゝる見解に與しないものである。」[6]以上の主張を見れば、各民族は經濟學の抽象理論を以ては割り切れない特殊な經濟を持つてゐること、各國の經濟は何れもイギリス的經濟へと一直線の發展を辿るものではないこと等について、ジョオンズは相當はつきりした認識を持つてゐた樣である。

それではジョオンズ自身はそれ〳〵特殊な構造を持つ各國の經濟社會を如何なる理論を以つて分析しようとするのか。彼がこの際適用しようとする理論を假りに「經濟構成の理論」と呼ぶことが出來る。ジョオンズの言葉に從へば「諸國民の經濟構成」(economical structure of nations)であるが、それは經濟生活の社會的構成とも言へるし、

5) Jones, An Essay on the Distribution of Wealth, p. 306.
6) Jones, Literary Remains, p. 558.

又彼が物的生産を中心とする階級構成の意味によく用ひる點からすれば、所謂「生産關係」と云ふ言葉にも相當するだらう。

ところで市民經濟學の歴史に於て經濟生活の階級的構成を認めたのはジョオンズが最初の人ではない。吾々は重農學派、特にチュルゴオにもこの點について優秀な理論を見出すし、英國經濟學ではスミス等にも封建的、資本主義的階級構成に關する斷片的な理論を發見することが出來る。併し英國經濟學全體を通じて見れば階級構成の全面的な姿は見失はれてゐると言つた方が正しい。例へばリカルドに見られる地主、資本家、勞働者の三階級は經濟理論の自明の前提であるかの樣にそれ自體何等分析されず、たゞ商品價格の構成要素たる地代、利潤、勞銀に關する限りで問題になつてゐるに過ぎない。其は要するに平板的な市場經濟論に過ぎない。其は第一に如何なる國民の經濟を對象としても、その中に見られる複雜な而も立體的な經濟構成を平面的な價格論に飜譯して了ふ點に於て誤謬であり、第二にこの價格論自體が特定の英國的經濟構成を前提とするものであり乍ら、これを全く異る構成をもつ經濟社會に適用しようとする點に於て誤謬であると云はねばならない。

ジョオンズは斯樣な誤謬を免れてゐた。けだし彼は經濟現象をすべて特定の歴史的、社會的內容を持つ經濟構成から切離して考へることをしなかつたからである。例へば普通の市民經濟學者は資本をその社會的環境より切離しそれ自身の內に何か神祕な自己增殖する力を考へるのであるが、ジョオンズは資本もやはり一定の經濟構成の表現形態であると解釋してゐた。それで英國の資本をアイルランドやインドへ輸出してもそのまゝでは直に收益をあげることは不可能で、むしろ資本に使はれる勞働者や農民の生活、勞働能率を英國的水準にまで引上げることこそ肝要であるとした。更にその勞働能率も、ジョオンズの解するところによれば、特定の經濟構成によつ

て規定されるのであつて、例へば英國の草刈人夫が二人でする仕事をロシヤの農奴が六人で完成したり、英國の工場勞働者がインドの手織職人より數倍の能率をあげる例は勞働者の勤勉や怠惰等の人間性に基くものではなくて、彼等がその中に編入されてゐる經濟構成の相違に基くものである。[7]

それでは斯樣に重要な意義を持つ所謂「經濟構成」はどんな內容を持つだらうか。ジョオンズはこれを二つの基本形態に分類した。吾々が假りに經濟構成の第一形態と呼び得るものは、土地の所有關係と土地の剩餘生產物の分配によつて社會の諸階級の間に形成される關係である。この經濟構成に於ては農民は直接土地より彼の生活資料(勞銀)を再生產する。地主は農民より收取した剩餘生產物の分配者として最も重要な社會的、政治的地位を占める。非農業階級、特に工業階級は地主の剩餘生產物の分配に依存して生活する。而て「斯樣な社會狀態に於ては土地所有者とその占有者の關係は大多數の人々の微細な狀態や政治體制の精神及び形態をも決定する。」[8]つまり第一形態の經濟構成とは前資本主義的農業社會一般を意味するものゝ樣に思はれる。

經濟構成の第二形態は地主、農民以外に產業資本家の登場によつて特色づけられる。この經濟構成では農民は地主の支配から解放されると同時に、生活手段としての土地より切離され資本家より賃銀を支拂はれるところの農業勞働者となる。工業者も亦地主への依存から脫して資本家の賃銀勞働者となる。かくて資本家は地主に代つて、この社會の生產物の分配者となり、政治的權力を獲得するが、其と同時に農民や勞働者も地主の傳統的支配から免れて政治への參加を目指して進む。かくてジョオンズの所謂第二形態の經濟構成は近代資本主義社會を意味するものと見てさしつかへないであらう。

以上の第一形態と第二形態とはジョオンズによれば經濟構成の最低段階と最高段階とを示す兩極端である。こ

7) Jones, Distribution of Wealth. p. 50.
8) Jones, ibid. Preface.

れまで各國に見られた歴史的事實によれば、經濟構成は第一のものより第二のものに發展する傾向を持つてゐる。而もジョオンズによれば「これらすべての變化、社會の變質の大なる力、つまりその變化が動き出す起動力は資本である。[9]」即ち一定の社會に於ける資本蓄積の度合により第一形態と第二形態の間に樣々のニュアンスを持つた經濟構成の形態が現れる。而てジョオンズは是等の經濟構成の實在の姿をアジアからヨーロッパにかけて存在する諸國について實證した。今それらの形態は省略するとして、第一と第二の形態についてのみ云へば、前者の典型はアジアに於て發見され、後者の典型は英國に見出される。かくして吾々は東洋社會の理論的位置づけについて重要な手がかりを得たわけである。

三　ジョオンズの東洋社會分析

アジア社會が第一形態の經濟構成を代表するとすれば、ジョオンズの言ふ樣にこの社會は特定の土地所有關係に基礎をおくことは明かである。然るに土地所有の關係は地代形態の中に集中的にその姿を現すものであるから、地代形態の分析こそこの社會の特質を把握する鍵でなければならない。ところでジョオンズによれば經濟構成の二つの形態に應じて地代にも二つの基本形態がある。即ち第一次的地代＝農夫地代 (peasant rent) と第二次的地代＝農業者地代 (farmer's rent) とである。リカルドの地代論は土地への自由な資本投下を前提として、農業資本の利潤より支拂はれる農業者地代のみを把握したに過ぎないが、これはヨーロッパの一部に見られるもので、世界の廣大な領域を覆ふてゐるものは農夫地代である。而もこれこそ地代の始源的形態であり、地代一般の起源がそこに求められねばならない樣な性質のものである。例へば農奴解放前のロシヤに於ける勞働地代或は農奴地

9) Jones, Literary Remains. p. 555.

代、革命前のフランスの分益農地代、アイルランドの零細農地代(cottier rent)、最後に吾々當面の問題であるアジアのライオット地代(ryot rent)等これである。

ライオット地代とは農民が直接土地より自分自身の生活資料を再生產しつゝ、その剩過生產物を以て土地所有者たる君主に支拂ふ現物地代である。アジアでは一般に君主がすべての土地に對する所有權を握つて居り、而もその土地は其がなければ餓死せざるを得ない多くの農民によつて占有されてゐる。これがために土地生產力が停滯的であるにも拘らず、地主としてのアジアの君主はヨーロッパにその例を見ない樣な莫大な地代を思ふまゝに收取することが出來るのである。「アジア全體を通じて君主がこれまでその領土の土地に對する排他的特權を持つてゐた。そして君主はこの特權を分割したり破棄したりする事の出來ぬ全一性に於て保存してゐた。其處では人民は一般に唯一の地主たる君主の小作人である。……生活資料のためにすべての人民が君主權に依存してゐるこの事實こそ東洋社會不滅のデスポティズムの眞實の基礎をなすものである。」[10]そして斯樣な人民の君主に對するアジア的隷屬關係が後世にまで殘存してゐる限り、アジア的專制君主の後繼者たるヨーロッパの政府は柔順なるアジアの人民を支配することが出來る。「民衆をして死物狂ひで一片の土地にかぢりつかせるすべての原因はまた上なる權力に服從する習性の原因でもある。そして吾々は又こゝに外國政府が遠く離れてゐても柔順な人民を支配することが出來る大衆的隷屬の主要な原因を見るのである。かくして吾々はインドを支配してゐる。正義と適正な節度が守られるならば吾々は永く支配をつゞけることが出來よう。」[11]かくて吾々はアジア的經濟構成が又ヨーロッパ的、特にイギリス的支配を容易に導き入れる原因であることをジョオンズ自身の口から聞くことが出來るのである。

10) Jones, Distribution of Wealth. p. 8.
11) Jones, Literary Remains. p. 457.

ジョオンズは以上の樣にアジア的經濟構成の基本的特徵を國家的土地所有に求めた。これはジョオンズのみならず、ゼームス・ミルの「印度史」以來多くのヨーロッパの學者が採用した見解らしい。一般にアジアの國家的土地所有說を基礎づける材料になつたものは次の樣な事實である。第一にアジアではヨーロッパに見られる樣な多數の獨立せる封建的土地所有が存在せず、領主はすべて强大な專制國家に服從してゐる。第二にアジア的專制君主は土地生產物の極めて大なる割合を收取するので、それは到底租稅とは見られず、むしろ地代であると推定され、そこから君主の土地所有權說が導出される。第三に君主の土地所有權を辯護するイデオロギー、特にインドでは回教徒の教義が存在する。併し是等すべての事實にも拘らずジョオンズ自身も國家的土地所有の理論を押通したわけではない。彼はアジアの農民を君主の小作人と見做したが、普通の小作人以上に大なる慣習的、世襲的權利が彼等に與へられてゐる事實を無視することは出來なかつた。この事實は國家的土地所有よりも更に根源的な土地所有を、アジア的經濟構成よりも更に舊い經濟構成を推定せしめる手がかりとなつた筈である。今日の社會科學の知識よりすればそれは血族的所有、村落共同體的所有に相當するだらう。ジョオンズもインドの行政官からの報告によつて村落共同體の存在及びその內部構造に關する知識を持つてゐた。併し彼は村落共同體の歷史的意義を理解せず、而も一そう惡いことには國家的所有權を「社會の一般的所有權」(general rights of the community)と混同してゐるのである。勿論專制的支配形態（專制的貢租收取形態を含む）と共同社會的土地所有とはスラブ民族やアジアの諸民族の歷史に於て重疊的關係をとつて現れてゐるけれども、この事實は兩者が同一物であると云ふ說明の根據にはならない。要するにもしジョオンズが專制的支配と共同體的所有とを明確に區別し、特にインドの村落共同體の歷史的地位を正しく把握してゐたならば、彼のアジア的經濟構成の分析は更に進んでゐたであら

うと思はれるのである。

次にアジア的經濟構成の他の側面、卽ち剩餘生產物の分配と消費の方面を考察しよう。既に述べた樣にライオット地代は專制的支配關係によつて收取され、農民の生活を脅威する程の額に昇ることもあるが、彼等の勞働生產力が低いために全體の量は限られてゐる。それでこの剩餘生產物によつて養ひ得る非農業的勞働者の數も限られてゐるので、ライオット地代の支配するアジアは必然的に農業國たらざるを得ないのである。

さてライオット地代の形式で收取された剩餘生產物は君主の收入として一應ことごとく君主の手に集められ、そこから宮廷職人、手工業者、官吏、軍人其他の非農業的勞働者に分配される。斯樣な君主の收入を中心とするアジア的分配形式は產業資本を中心とするヨーロッパ的分配形式に對して種々の特色を持つてゐる。こゝでジョオンズはかのアダム・スミスに於ける收入と資本の區別、生產的勞働と不生產的勞働の區別に重要な意義を認め、これをアジア社會の分析に利用しようとしてゐることがわかる。尤も後の生產的、不生產的勞働の區別に至つてはジョオンズのそのまゝ採用するところとはならなかつたが、君主の收入によつて養はれるアジア的勞働の生產力は資本によつて傭はれる勞働の生產力よりも低いと主張する點では、スミスに一脈相通ずるものがある。

非農業勞働者が地主＝君主に養はれ、君主の需要を充足すべく勞働する結果として、こゝにヨーロッパには見られないアジアの特色が現はれる。第一にヨーロッパのマニュファクチュアーは燃料、水力其他動力の所在地に引きつけられるが、アジアに於ては手工業者は剩餘生產物の消費者の所在地にひきづけられる。ジョオンズは十七世紀モガール王朝の宮廷醫師となつたフランソワ・ベルニエ (François Bernier) の手記を引用しつゝ次の樣に言ふ。印度モガール王朝のアウランゼッブ大王 (Aurangzeb) がカシミール地方に旅行すれば、忽ち手工業者や職人の

大群が大王に從つて首都デリーを出發した。又その後この大王がデカン高原地方に轉戰した時、その陣營が消費の中心となり、宮廷の消費に依存してゐた人々が群り集つた。[12] 以上の樣な非農業勞働者の君主に對する直接的隷屬のために彼等の居處であるアジアの都市は王朝の興亡とその運命をともにするのである。「サマルカンドから南の方ビージアプール及びセリンガパタムに至る間に吾々は消滅しつゝある首都の廢墟を辿ることが出來る。その首都の人口は王朝の收入、つまり土地の剩餘收入の新な分配中心地が形成されるや否や其處を立去つたのである。[13]」

第二の特色はアジア的非農業勞働の本質的な脆弱さにも拘らず、それはしば〳〵巨大な業蹟を殘すと云ふことである。それは既に述べた樣に、剩餘生產物を國家に集中して、そこから一時に大量的に支出するアジア的經濟構成の特質の故に、勞働力を大規模な協業形態に編成し、これを濫費し得るからである。これがためにアジア的非農業勞働の低度の生產性にも拘らず、今だに吾々を驚歎させる樣な遺蹟、例へばエジプトのピラミッド、インドの宮殿や靈廟、支那の城壁、アッシリヤからメソポタミヤの草原を蔽ふてゐる巨大な記念物等を殘してゐるのである。

ジョオンズは以上の樣にアジアの非農業勞働を專制的支配形態との關係からのみ考察してゐるが、これだけではもとよりこの勞働のアジア的性格を盡したとは云へない。この場合にも村落共同體內部の世襲的手工業者や共同體の一變形としてのギルド組織に據る職人等を考慮に入れなければならないことは明かである。然るにアジア的經濟構成の基本的特徵として專制的支配關係を强調するジョオンズはかゝる支配關係の中に取入れられた非農業勞働のみを問題にしたので、アジア的工業の一層始源的な形態を充分評價することが出來なかつたのである。

12) Jones, Literary Remains. p. 447.
13) Jones, ibid. p. 449.

アジア的經濟構成に關するジョオンズの理解はほゞ以上に盡きると思ふ。こゝでは更に彼がアジア的經濟構成の發展について如何なる見通しを持つてゐたかを簡單に述べて見たい。ジョオンズは前述の樣に經濟構成の第一形態が第二形態の方向に發展する契機は資本の蓄積或は資本家の發生であると考へてゐた。資本の成長に從つて第一に勞働時間が規則的、繼續的となり生產力が增進する。第二に地主對勞働者の關係が變化し、其がやがて政治、社會全般の變動を促す。「社會の相異れる階級を結びつける所の諸々の連繫が變化する。土地所有者と非農業者の一部との間に中間階級(資本家)が現れる。而てこの中間階級に非農業者はその雇入れと支持とを依賴することになるのである。從來の社會を一つに結びつけてゐた紐帶は使ひ古され寸斷されてしまふ。他の紐帶が、他の結合の原則がその相異る階級を結びつける。新しい經濟諸關係が現れ來り、政治體制の中に新鮮な力ある政治的要素が混入して來る。」斯樣にジョオンズは經濟構成の發展一般を生々と敍述してゐる。

それではアジアに斯樣な發展が見られるであらうか。ジョオンズの答へは否定的であつた。その理由を彼は次の樣に說明する。アジア的經濟構成が變化するためには、その構成の樞軸をなす土地所有者として專制君主の權力に制限が加へられねばならないが、この專制的權力に對する唯一の對抗的な勢力たる都市の非農業者階級が恰も君主や官吏の消費に依存してゐるのである。「市民はアジアの隷民の中でも最も無力な卑賤なものである。」[14] 何故にさうであるかと云へば、アジアでは君主が唯一最高の土地所有者であつたために、ヨーロッパの君主の樣に封建領主と勢力爭ひをする必要もなく、又そのために都市と同盟して市民に政治的特權を與へる必要もなかつたからである。都市の市民＝資本家が成長しなければ農民を地主の收奪から擁護し、工業勞働者を地主への隷屬から解放して、勞働生產力を高める社會的勢力も發生しないわけである。ジョオンズは地主が啓蒙的な立場から農

14) Jones, Distribution of Wealth. p. 139.

民を解放して歴史的進歩のイニシャティブをとる可能性をも考へてゐた。併し彼はアジアの專制君主に關する限りこの可能性を認めなかつた。從つてジョオンズはアジアの進歩については全く悲觀的であつた。「吾々は將來を明かにすることは出來ない。併しその將來が過去や現在のものと本質的に異るであらうやうな時代について思索せしめるが如き性格はアジアの民衆には殆んど存しない。」[15]

四　東洋社會論に於ける歴史主義の限界

ジョオンズが經濟學の諸範疇について持つてゐた鋭い歴史的、社會的感覺、特に東洋社會の分析に關して示した優秀な理論等に於て、當時の自由貿易主義の英國經濟學を斷然壓しゐることは疑を容れない。たゞ彼の經濟學の特色であり又東洋社會の分析に際して用ひられた歴史的方法については批判の餘地があるのであつて、その一斑はアジアの進歩を全面的に否定する態度の中に現れてゐる。それ故に吾々はこの點を手がかりとしてジョオンズの批判を進めよう。

ジョオンズの歴史主義は英國經濟學の所謂進歩主義、その抽象性に對して充分批判的役割を果してゐた。けだし當時世界史の最高段階を形成しつゝあつた英國人及英國經濟學があまりにも安易にその意義を無視してしまつた歴史的傳統が尙世界の廣き領域、殊にアジアに存在する事實を指適したからである。然るにこの歴史主義はアジアに對する時は別の態度をとる。卽ち世界諸民族の發展には遲速の差があつて、イギリスは最高の經濟構成に達し、アジアは最低段階に停止してゐると言ふのである。ジョオンズの「歴史」は過去より現在までの發展であり、未來への發展に對する展望を含まない。それ故にアジアの民族が將來イギリス的段階に接近するか否かはジョオンズの問題外である。「他の諸國民の未來は何時かは吾々の現在の樣になるだらう。恐らくさうなるかも知

15) Jones, ibid. p. 142.

れない。豫言と云ふものは大膽なものである。併し吾々が未來に對していだく關心は如何に大きくても、要するに第二次的のものでしかあり得ない。……過去の歷史を說明し吾國や他の國の現在の狀態を明かにする經濟學的研究こそ吾々にとつて敎訓的である。[16]」

斯樣に現在から過去へのみ眼をふりむける歷史主義よりどんな結果が出て來るか。第一にイギリス的經濟構成を以て最高となす所以は、遲れた諸民族に將來到達すべき理想を示すよりも、むしろ現在に於ける英國的段階の優越を示すためである。ジョオンズの「歷史」は諸民族をそれ〴〵の現在の地位に束縛して動かない。其は十九世的世界秩序に於ける民族のレベルの相違とその間に於ける支配關係との是認であり、結局はイギリスの世界制覇の是認でもあらう。第二にジョオンズの歷史主義はアジアの未來性のみではなく、イギリス自身のそれをも問はない。彼にとつては十九世紀の英國的經濟構成こそ理想的のものであり、地主、資本家、勞働者の利益は永久に調和すべきものである。ジョオンズの方法の批判的意義にも拘らず、彼が英國的經濟構成の高みに安住してゐる點では他の英國經濟學と同樣である。事實彼は例へば地代の「歷史」に於てリカルドを批判したけれども、地代の「理論」に於てはリカルドのそれと本質的に異つたものではないと云はれてゐる。[17] 私がジョオンズ的方法を以て市民經濟學內部に於ける自己反省の型と云つたのは其點を指したのである。

以上の樣な限界を持つジョオンズの歷史主義的經濟學は動きつゝあるアジアを把握することは出來なかつた。ヨーロッパ的經濟構成とアジア的經濟構成とは互に固定した上下の段階の關係を保つてゐるのではなくて、歐洲はアジアに働きかけアジアはこの働きかけを通じて其經濟構成の內部に深刻な變化を起こした。特にジョオンズの所謂歷史的發展の動因たる產業資本——其は英國的經濟構成の中樞をなす產業資本と敵對關係にある紡績工業——の成長によつて、アジア的經濟構成は其內部から崩壞し、同時にアジアに對するヨーロッパ的支配關係も動搖し

16) Jones, Literary Remains. p. 559.
17) 堀經夫著、經濟學史要論、第三分册。

てゐるのである。ジョオンズは斯樣な事實を看過した。併しこれは獨りジョオンズ經濟學のみの缺陷ではなく、十九世紀に於ける歷史的方法なるもの一般に共通な、殆んどヨーロッパ的とも云へる限界であつたことを示すために全く別の方向から一つの例をあげて見たい。

其はかのヘンリー・メーンの歷史法學である。メーンは周知の樣に十九世紀の中葉數年間印度政廳參事院の最高法顧問を務め、印度古代法の研究に從事した。元來彼の歷史法學はヨーロッパ的、市民的法律制度に眼界をさへぎられてゐる法律學者や法律技師に對して批判的態度をとり、ヨーロッパに見られる樣な「進步的社會」(progressive society) 以外に廣大な「停滯的社會」(stationary society) が存在する事實を指適したものだ。彼は「古代法律」の中で次の樣に言ふ。「人類の停滯的狀態が原則であつて、進步的狀態は例外であることをはつきり理解しない人は恐らくこの研究に成功しないであらう。」[18] 斯樣な見解は恐らく啓蒙主義的法律學の進步主義に對する一種の反動でもあらう。而て又此處に吾々はジョオンズ經濟學の正統派經濟學に對する關係と同樣なものを發見するであらう。殊にメーンが停滯的社會の型としてアジアに注目する時、この事實はいよ〳〵確定的となるのである。例へば彼は村落共同體に關する研究の中で斯う云つてゐる。「最も文明化した社會や偉大な思想家でも拔け切らないでゐる世界人類のせまい概念から或程度吾々自身を解放したとすれば、又人類社會の現象の廣大さと多樣さについて何程かの適切な觀念を持ち、殊に吾々が漠然と東洋と呼んでゐるこの大なる而も未開の領域を省略して了ふことをしなかつたとしたら、現在と過去との區別が消滅すると言つても敢へて誤りではなく、又パラドックスでもないことがわかるだらう。」[19]「現在と過去との區別が消滅する」とはメーンの意義に解釋すれば、現在の中に過去の遺制が多分に殘存してゐると云ふことであり、又ヨーロッパ的見地からすれば既に過去となつた社會、殊に東洋的社會が現在の世界秩序の中に存在すると云ふ意味である。

18) Sir H. S. Maine, Ancient Law. p. 20.
19) Maine, Village Community in The East and West. p. 7.

斯様なメーンの法律學批判が更に當時の英國經濟學批判にまで進んでゐる事實を知る時、吾々は廣く十九世紀の歴史主義的思潮の中に於ける法律學と經濟學との交流關係を思はざるを得ないのである。併しメーンの經濟學批判は根本的にジョオンズ的方向に一致するけれども、其は印度の村落共同體の認識に基礎づけられてゐる點では、專制的支配關係にのみ注目したジョオンズよりも一歩進んでゐる。ところでメーンの批判の内容は要約すればかうである。印度に現存してゐる村落共同體若しくは其遺制によつて、現代の商品經濟と矛盾する様な慣習で規制せられた經濟生活の相當大なる領域がかつて存在し又現に存在してゐることを實證することが出來る。從つて近代經濟學に於ける自由な市場、競爭價格、利己的人間等の前提は實に狹隘なヨーロッパ的偏見に基くものに過ぎない。東洋社會の認識を根據とするこのメーンの經濟學批判は示唆的であり、又正しいものを含んでゐる。併しメーンの歴史主義的批判の構造にはジョオンズと同様な限界が含まれてゐることを忘れてはならない。

メーンの批判は經濟學乃至法律學に共通な自然法的、非歴史的態度に向けられたゞけである。反對に彼は共同社會が分解した後に發生して來る市民社會に於て經濟學の法則がそのまゝ妥當すると考へるのである。從つてメーンの歴史觀は「身分から契約へ」(from Status to Contract)[20]と云ふ定式に現はされる様な世界資本主義化の認識以上に出るものではなく、この點に於て結局市民的法律學、經濟學と一致するのである。メーンはこの發展の定式をヨーロッパの影響をうけて動きつゝあるアジアに適用した。其は或限界内に於ては正しかつたし、又アジアを全く固定したものと見たジョオンズよりも一歩出てゐたと言へよう。併し「身分から契約へ」の定式は「共同社會から利益社會へ」のそれと同様に、十九世紀から廿世紀へかけて様々の發展方向を複合的に現し始めた東洋社會を具體的に把握することは出來ない。それは恰もジョオンズの方法が十八世紀から十九世紀へかけての東洋の動きをとらへることが出來なかつたのと同様である。

20) Maine, Ancient Law. p. 141.